

目的 子供が住空間の実態についてどの程度認知しどのような住意識をもっているか、またそれらがどのような要因によって影響を受けるのかについて解明することを目的とする。本報では、まず住宅にある生活用品の配置、収納場所の認知について報告する。

方法 四日市市内にあるH小学校の3年～6年生を対象として、昭和58年7月に子供用と親用の調査用紙に別々に記入してもらったアンケート調査を実施した。そのうち、住空間実態の認知については、5・6年生のみを分析の対象としている。有効標本数は5年157件、6年122件であった。生活用品は、家具(5品目)、衣類(4品目)、洗濯・掃除用品(6品目)、台所用品(15品目)、客用品(3品目)をとりあげ、子供に配置・収納場所を知っているかどうか、知っている場合にはどこにあるかを回答させた。別に母親が回答した実態と比較して、一致、部分的な一致、不一致と子供の非認知の構造について分析した。

結果、①子供が知らないと答える率は各品目とも高くないが、一致率が6割を下回るものが大半を占めている。②一致率が高い品目は、それが固定している場合、使用頻度の多い品目の場合であり、逆に一致率の低い品目は、配置・収納場所数の多い品目あるいはそれが一定していない品目の場合と、使用頻度の少ない品目の場合である。③各品目について、配置・収納場所数と一致率の関係をみると、全体的にその場所数が増加すると一致率が低くなる傾向がとらえられた。④配置・収納場所の性格別に一致率をみると収納場所が使用場所から離れている場合には一致率が低くなる傾向がとらえられた。